

寄稿

愛媛県立今治北高等学校大三島分校における学校魅力化の取組

——地域資源及び地域活性化活動を核にした教育活動の実践を通して——

愛媛県教育委員会事務局指導部高校教育課教職員係管理主事

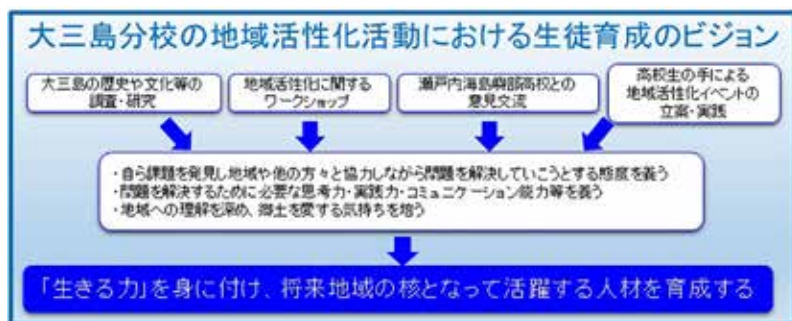
(元愛媛県立今治北高等学校大三島分校教務主任／令和二年三月まで)

吉住 牧人

1 大三島分校を取り巻く現状

本校は、広島県との県境、愛媛県の最北端に位置する大三島に、昭和二三年愛媛県立大三島高等学校として設立され、今日まで地域を支える人材育成の拠点として歩んできた。近年は過疎化、少子高齢化の影響で生徒数が急激に減少し、平成一七年に愛媛県立今治北高等学校大三島分校として再編され、現在に至っている。愛媛県が定めた県立学校再編整備計画基準では、「一学年の入学生が三〇人以下の状況が二年続き、その後も増える見込みがない場合は募集停止を行う」という厳しい条件が設定されており、これまでも大三島島内のみならず、今

治市内をはじめとする島外の生徒にも積極的に声をかけ、入学志願者の増加に努めてきた。しかし、平成二九・三〇年度入試において二年連続で入学者が基準を下回り、これまで以上に志願者を確保する必要があるため、平成三一年度入試から全国募集を開始するとともに、学校のさらなる魅力化と県内外での学校のPR活動を積極的に行った。これらの取組が功を奏し、平成三一年度は基準を大きく上回る四〇名の生徒が入学し、当面の廃校の危機は脱することができた。とはいえ、地元大三島中学校の生徒数は、現三年生が三六名、現二年生が二一名と減少の一途をたどっているなど、生徒募集に係る課題は山積している。



2 本校の教育活動のねらい

大三島は少子高齢化が進行し、若者の数が急速に減少している。現在、島内の人口は六千人ほどであるが、その約半数が六五歳以上の高齢者であり、七五歳以上の後期高齢者の割合も約三〇％と極めて高い。島内の子ども数が減少し続けている昨今の状況を踏まえると、今後も安定した生徒数を確保していくためには、目の前の生徒募集に力を入れることのみならず、島への移住者や島に残る若者を増やすといった、中・長期的な視点での取組も必要不可欠である。また、政府の教育再生実行会議が二〇一九年五月にまとめた第一次提言では、高等学校普通科の改革について言及されたが、その改革の骨子として、画一化された教育カリキュラムから脱却し、各学校で特色のある教育活動を実践するよう提言されている。グローバル化やAIなどの技術革新が急速に進む予測困難なこ

れからの時代には、子どもたちが自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく力が求められる。

学校が生徒にとって真に魅力ある場所になるためには、特色ある教育活動の実践を通して、生徒が望ましい成長を遂げられることが大切である。また、入学志願者の確保のためには、本校でしか行えない学びの実践とその情報発信が特に重要となってくる。これらのことを踏まえ、本校では地域資源・地域人材を活かした島ならではの特色ある教育活動の実践を通して、「生きる力」を身に付け、将来地域の核となって活躍できる人材を育成することを学校の最も重要な教育目標の一つに掲げ、学校の魅力化に取り組んでいる。

3 本校の教育活動の実際

(1) 地域資源・地域人材を活かした島ならではの教育活動

本校では、地域を愛する心を養い、心身ともに健全で豊かな感性を持った生徒を育てることを目標として、島ならではの楽しく充実した教育活動を実践している。具体的には、島を三年間かけて一周する島内歩行大会、学校裏の海で行うマリンスポーツやボート大会、地元の板前さんを講師として招き、魚の捌き方を一から学べる調理講習会などがある。これらの教育活動は、生徒たちからも大変好評で、特にマリンスポーツについては、この活動を目当てに本校を受験する生徒も

数多くおり、本校にとって欠くことのできない教育活動の一つである。

（2）これまで取り組んできた地域活性化活動

高校生の手で地域を盛り上げていくため、本校では各種団体等と協力しながらこれまでに以下のような活動を行ってきた。

ア 大山祇神社参道のボランティアガイド

平成二五年度に本校が実施した「地域活性化プロジェクト」の一環として始めた活動である。宮浦港から大山祇神社までの参道を歩きながら、観光客の方に、あまり知られていない参道の歴史や文化を紹介している。ガイドメンバーは有志の生徒約一五名で構成しており、ガイドを実践する前には、地域の歴史学習やコースの下見、役割分担の



マリンスポーツの様子

確認等を行って本番に臨んでいる。聞き取り調査やガイド活動を通して生徒自身が大三島の魅力を再発見するとともに、それらを多くの人に知ってもらうことで観光客等の増加につなげることを目標に掲げている。今年度は外国人観光客に対しても英語でガイドができるスキルを身に付けるべく、ガイド実践生徒に対して英語科教員による個別指導を行っている。まだまだ技術は未熟であるが、改訂した英語版パンフレットの抜き刷りを用い、教員の助けも借りながら外国人向けのガイドを実践している。

【参道ガイド後にいただいた手紙】

私は、先日の大三島参道マーケットで母校の歴史ガイドの皆さんにお世話になった者です。島を離れて以来、五〇年余りに島を歩きました。

お店を見ながら聞かせてもらった説明がなつかしい記憶を次々と驚くほど蘇らせてくれました。パンフレットもよくここまで調べ上げられましたね。生徒さんのお名前を見てひよっとしたら知り合いのお孫さんもいらつしやるのだとは思いつつ、じっくり読ませていただきました。

お一人お一人が全力で島の力になってくれていることがしつかり伝わりました。同じく卒業生の姉との電話のやりとりも、いただいた冊子を見ながら今までにもましてふるさとを熱く語り合うようになりました。

（中略）

観光に来られた人達だけでなく、長く島を離れていた私たちも感

動させてもらえるすばらしい活動だと思います。ありがとうございます。

イ 伊東建築塾との協働「島デザイン部」

伊東建築塾は世界的建築家の伊東豊雄氏が塾長を務め、建築を通じて「大三島を日本でいちばん住みたい島にする」というコンセプトの下、様々な地域活性化活動を行っている。本校も伊東建築塾と協働して様々な地域活性化活動に取り組んできたが、毎回全校生徒の半数近い数十名の生徒が活動に参加してきた。これまでの活動事例を以下に示す。

二〇一三年度

宮浦新地区の昭和三〇年代の「イラストマップ」と「街並み模型」の制作

二〇一四年度

旧法務局の建物を島内外の人が気軽に立ち寄れる場「みんなの家」として改修

二〇一五年度

小規模作業所「さざなみ園」で使う椅子作り

二〇一六年度

熊本地震の被災地に送る椅子の製作、住民やサイクリストらが気軽に集える「島の休憩所」を改修

二〇一七年度

公民館の「めがね椅子」をリフォーム、旧小学校の木造校舎を利用した宿泊施設「大三島憩の家」のリノベーション

二〇一八年度

大山祇神社参道入り口に参道紹介の看板を設置、「紙で理想の家を作る」ワークショップへの参加

二〇一九年度

県外生徒のための下宿を改修、「参道の空き家の有効活用」に関するワークショップへの参加

ウ 瀬戸内島嶼部高校との意見交換会や地域PRイベントの創出

平成二六年度から、瀬戸内島嶼部の愛媛県と広島県の高校が集まり、地域活性化についての意見交換会を行っている。昨年度は広島から四校と愛媛から四校の計八校が集まり、道の駅多々羅しまなみ公園で高校生による地域PRイベントを開催した。

このイベントでは、伊東豊雄氏と高校生との地域活性化に関するトークセッションも併せて行われた。

今年度は、愛媛、広島、高知、岡山の四県二〇校と交流活動を行った。

エ 地域おこしイベントの創出

大三島に活気が溢れていた時代の夜市を復活させ、大山祇神社参道に賑わいを取り戻そうと、地域の方々と協力して「夕涼み会」を開催し、地域の方々から好評を得た。ブース内容の多くは分校生のアイデアであり、準備・当日の運営・片付けまで多くの分校生が関わって作り上げた手作り感満載のイベントであった。

オ 大三島紹介パンフレット「私たちの大三島」の作成

島の魅力を多くの人にPRするとともに、生徒の地域活性化への意識を向上させることなどを目的として、高校生目線で島の魅力を紹介したA5版六四ページのパンフレット「私たちの大三島」高校生が伝える大三島の魅力」を作成した。完成したパンフレットは島内外の各所に配架させていただいたり、高校生自らが配布しながら大三島の



作成した英語版パンフレットの一部

PR活動を行ったりしている。今年度は改訂版及び英語版パンフレットの作成を行った。

カ「大三島お仕事図鑑」の作成と移住者への情報提供

今年度は伊東建築塾や商工会、各事業所等の協力の下、島内の職業についての調査・研究を行い、B5版三二ページのパンフレットを作成した。大三島の職業に対する取材、調査及び移住者への情報提供を通して、大三島への移住者の増加を図るとともに、生徒自身が大三島における雇用や産業の現状や明るい展望を感じ取り、将来大三島に定住したいと考えられる人材を少しでも増やしたいと考えている。

キ「高校生大三島定住促進アンバサダー」の育成

島の定住人口を増やすために、大三島の魅力や仕事などについて、島内外の各所でPR活動を行うことを想定した広報大使「高校生大三島定住促進アンバサダー」を育成している。今年度は準備段階であったが、次年度以降は東京、大阪で開催されている移住フェアにおいて、「私たちの大三島」や「大三島お仕事図鑑」等のパンフレットを用いて、移住希望者に対する大三島の仕事や魅力などの情報発信をはじめとする積極的な働きかけを行いたいと考えている。また将来的には、今治市の地域振興課や地元企業と連携して大三島移住促進ツアー等を企画、立案するとともに、島を訪れてくださった方々のエスコートも担当したいと考えている。

(3) 学校存続に向けたPR活動

ア 県内外での学校説明会

昨年度は本校独自で学校説明会を開催していたが、今年度から「地域みらい留学」に参画し、東京、名古屋、大阪、福岡の合計四か所で学校説明会を開催した。また、本校独自に福山でも説明会を実施したが、本校生徒もその説明会に参加し、学校のPRに努めた。県外五か所での説明会の参加人数は、延べ一五〇人を超え、中学三年生だけでなく、中学一・二年生やその保護者も説明会に参加してくださるなど、本校に対する関心の高さがうかがえた。

イ マスコミを通じた情報発信

FM今治の「ラジオバリバリ」で月一回、本校生徒がパーソナリティーとなり分校のPR活動に努めている。また、FM福山のラジオ番組「あなたの出番です!」(パーソナリティー・小林史明氏【総務大臣政務官】)や「おはようときめきタイム」(びんごもぎたて情報)の各番組に本校生徒及び教員が出演した。また、テレビ愛媛、あいテレビ、NHK、毎日放送(大阪)等のテレビ局から取材を受け、オープンキャンパスや生徒募集に係る取組の様子など、多数の特集番組を放映していた。

テレビの影響力はかなり大きく、大阪で放映された毎日放送の番組を見て、後日行われたオープンキャンパスに参加してくださった方も複数名いらっしゃった。さらに、愛媛新聞、毎日新聞を中心に、各新

聞社には様々な機会を捉えて大三島分校についての数多くの記事を掲載していただいた。特に昨年度については、各紙に掲載された回数は延べ四五回を数え、大三島分校の生徒の活躍に対して紙面を見た多くの方からお声かけをいただき大変ありがたく感じている。

本校の看板となる部活動の一つである写真部の活躍もたびたびメディアで取り上げていただいた。特に写真甲子園での活躍については、新聞、テレビ等でも大きく紹介されるとともに、小学館発行の『写真甲子園シャッターガールmoment』というマンガにも、メインキャラクターのモデルとして取り上げられている。



FM 福山でのラジオ収録



毎日放送の収録の様子

4 取組の成果

これまで行ってきた地域活性化活動は、観光客や地域の方々からも好評で、東京や大阪に配架してあるパンフレットを手にした方が実際に大三島に観光に来てくださったたり、参道ガイドを体験した観光客がリピーターとなって再度島を訪れたりするなど確かな成果が認められる。さらに、多くの生徒に地域に対する理解や愛着の深まりが見られるなど、活動に参加した生徒に様々な成長が感じられたことも大きな収穫であった。

伊東建築塾との協働活動では、普通の高校では学ぶことのできない多くのことを生徒が体験することができている。そのような体験がきっかけとなり、近年は建築関係の大学や各種学校を高校卒業後の進路として選択する生徒が複数名いる。また、地域活性化活動がきっかけとなって、観光業と経済活動という点に興味を持ち、深い学びを求めて国立大学の経済学部観光政策学科に進学する生徒もいた。生徒が主体的な活動を行うことで、自己の将来について真剣に考え、具体的な進路目標を設定していく一助になっているように感じている。

参道ボランティアガイドでは、その時その時でガイド対象となる人の反応が異なる。生徒一人一人が情報発信の方法や対応の仕方などをするように工夫すればよいと考えながらガイドを行うことで、生徒のコミュニケーション能力や情報発信力にも確かな向上が見られたように感じる。

島嶼部高校との意見交換会では、高校生同士の交流が深まるとともに、お互いの地域の違いや良さを知ることができた。地域PRイベント

トでは、同じような地域課題を抱える学校でありながらも、学校ごとのプース内容はバラエティに富んだもので、今後本校が行う大三島のPRにも参考になるものが数多くあった。

「私たちの大三島」「大三島お仕事図鑑」などのパンフレット作成・改訂作業においては、取材や編集作業を通して大三島の新たな魅力を発見した生徒も多かったように感じている。また、印刷・出版できる状態にするには、かなりの労力が必要であることも生徒一人一人が実感できたように思う。さらに、パンフレットを用いたPR活動では、大三島分校の取組を評価してくださる方からの励ましの言葉によって、改めて地域の温かさを感じることができた。

地域おこしイベント「夕涼み会」は新たなイベントで、参道周辺地域の若い方々が発案し、大三島分校生に協力を依頼してきたものである。訪れた人だけでなく、実際に関わった生徒からも、イベントに対する肯定的な感想とともに、次年度以降の実施を望む声が多く聞かれたことが有意義な実践であったことを証明するものであると感じている。生徒たちのイベントの企画・運営能力の伸長に資する部分も大きかったように思う。

学校説明会を中心とする学校のPR活動についても、平成三十一年度の入学志願者が四二名となり四〇数年ぶりに定員を上回るなど大変大きな成果が得られた。生徒が先頭に立って動くことで、多くのマスクミやメディアも興味を持って本校の活動を取り上げてくれたように思う。また、建築家の伊東豊雄さんやF.C.今治オーナーの岡田武史さん、サイボウズ社長の青野慶久さんなどの著名な方までもが、本校の活動に対して興味を持ち、協力してくださったことに我々教職員も驚きを覚えた。自分たちがまず行動を起こすことで、人とのつながりができ、

新たなチャンスが生まれるということも、これまでの活動を通して生徒自身が実感できたのではないかと感じている。また、最初は原稿を見ながら不安げに説明をしていた生徒たちが、回数を重ねるごとに説明が上達し自信を持って説明ができるようになるなど、人前で話す経験は確実に生徒たちのコミュニケーション能力の伸長に役立っている。さらに、自分たちの学校の特徴や自分自身の能力について客観的に捉え、相手に説明する経験は、生徒のメタ認知能力の向上にも確実につながっている。

5 今後の展望

以上、大三島分校における地域活性化を核とした学校の魅力化について紹介してきたが、これらの活動を通して、生徒たちに確かな成長が感じられることは何より大きな収穫であり、本校の教育活動の方向性が妥当なものであることの裏付けとなっているように感じている。また、これらの活動を通して、生徒の大三島への愛着が深まるとともに、志願者の増加や地域の活性化についても着実な成果が見て取れることは、嬉しい限りである。

しかし、教育現場において地域活性化活動に取り組む限りにおいては、地域活性化の成果のみを目的化すべきではないということにも私たち教員は留意しなければならない。地域が元気になり、大三島に人が増えることはもちろん喜ばしいことであり、大三島の将来にとっても大切なことであるが、本校で行われる教育活動そのものが、大三島

の活性化のため、生徒数を増やすため、学校を存続させるためだけに行われる、生徒の成長をなおざりにしたものになってはならない。

魅力ある教育活動の実践には、地域資源・地域人材の活用を始めた地域の協力が必要不可欠である。大三島分校が生徒にとって本当に魅力のある学校となるよう、今後も地域・教職員が一体となって努力を続けていきたい。

本論文は令和元年度中に寄稿されたものです。